慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	台湾の都市における汎原住民的なつながり：台中市原住民族部落大学を事例に
Sub Title	Pan-aboriginal relationships in urban Taiwan : a case study of the Aboriginal Tribal College in Taichung
Author	益田, 喜和子(Masuda, Kiwako)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.54- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0054

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

台湾の都市における汎原住民的なつながり

――台中市原住民族部落大学を事例に――

Pan-Aboriginal Relationships in Urban Taiwan: A Case Study of the Aboriginal Tribal College in Taichung

益田　喜和子

１．はじめに

本稿の目的は、台湾の都市における原住民族部落・社区教育について、台中市原住民族部落大学を事例に、いかに汎原住民意識 [1]と自民族意識の共存が志向されているのかを検討することにある。

台湾の先住民族は現在、「原住民族」という総称のもと、公的に 16 の民族に分類されている。個々の民族の物質文化や言語、信仰などは異なり、日本植民地時代初期までの原住民族社会においては、基本的な政治的・経済的単位としての「部落」[2] が仲間と仇敵を区別する基準となっていたため、元来、原住民諸民族や部落間の衝突は繰り返し起こっていた。しかし、原住民族に対する外来政権の画一的な政策や抑圧と差別の歴史経験と台湾政治の民主化への動きとが相まって、1980 年代に原住民族運動が生起したことを端緒に、民族を超えた「原住民族」としてのつながりを高揚する「汎原住民意識」が顕在化した（e.g. 松岡 2012; 孫 1997; 謝 1987）。加えて近年、原郷を離れ都市へ移住する都市原住民 [3] が増加しており、都市における「原住民族」としてのつながりを軸とする汎原住民族規模の共同体や組織の重要性が増している。

こうした異なる民族が一民族としての枠組みを超え、包括的なエスニック・カテゴリーを構築することで生まれる複合的なつながりは、汎エスニシティ（Pan-ethnicity）と呼ばれる（Okamoto & Mora 2014: 220）。なかでも多民族・多文化社会では、ニュージーランドにおける汎マオリ意識やアメリカの汎インディアン意識など、異なる民族同士が先住民族として連帯する事例が顕著である（e. g. 阿部 2008; 深山 2012; Tomas 1965）。加えて、こうした汎エスニシティの構築や強化が、都市化と密接に関わっていることも指摘されている（Cornell 1988）。たとえば、アメリカの先住民族による汎インディアン意識の構築と汎インディアン・コミュニティの形成に関しては、政府による都市移住計画の推進と都市インディアンの増加などがその契機となっていることが明らかにされた（阿部 2003; 大野 2010）。

本稿の分析対象である台湾の原住民族に関しても、都市を中心に展開された原住民族運動が汎原住民意識の顕在化の嚆矢となり、都市原住民の増加がさらなる汎原住民族規模のコミュニティの形成や活動の促進につながっている。さまざまな地域から集まり、都市に散住する人々にとって、民族単位の大規模な活動やコミュニティの形成は容易くないことからも、漢人優勢社会である都市においては自民族だけでなく、その範疇を超えた「原住民族」としてのつなが

益田喜和子「台湾の都市における汎原住民的なつながり――台中市原住民族部落大学を事例に」『三田社会学』第 27 号（2022 年 7 月）53-67 頁

りが重要となる。

しかし、これまでの台湾における都市原住民研究では、汎原住民意識の顕在化と都市における原住民諸民族間の関係性の変容や汎原住民的なつながりのあり方に関して、十分に論じられていない。都市原住民研究の動向を分析した人類学者である李重志は、1985 年から 2015 年における研究の主な論点を「移住現象とその要因」、「経済、福利および生活適応問題」、同郷会や結社などを対象とした「都市コミュニティの問題」、「言語と文化継承」の 4 つに分類した（李 2016: 34）。いずれの研究においても、原住民の人々の都市への適応とそれに伴う経済的社会的困難の記述が主軸となっており、都市における異なる民族間の関係については、十分に検討されていない。

また、その調査対象にも大きな偏りがみられる。従来の都市原住民研究に関する学位論文を民族別に分類したデータをみてみると、民族規模が最大であるアミを対象とした研究が圧倒的に多く、その他の民族に関する研究はわずかであることが明らかとなっている（劉 2017）。調査対象としてアミが選ばれやすい理由について楊士範（2016）は、アミが都市移住後も集住する傾向にあり、大規模な集落や共同体を形成しやすい点をあげた。また、李は原住民族の中でアミの人口がもっとも多いこと以外に、1990 年代頃に問題となった都市アミによる違法建築集落問題が多くの研究者の関心を引いたことが、都市アミを分析対象とする研究の増加につながったことを指摘した（李 2016: 36）。現に近年の都市原住民研究に関しても、依然としてアミを調査対象としたものが多く、主題として都市原住民全体を扱った研究においても、その調査地や事例として用いられているのはアミ関連であることが指摘されている（劉 2017: 46-47）。

こうした調査対象の偏りは、アミ以外の都市原住民の人々の存在を見えづらくしている。たとえば、従来の都市アミに関する研究では、結社や同郷会などの組織が、移住先における人脈形成の場や政府の協力組織として機能しながら、人々の結束力を高めていることが指摘されてきた（尤 2014）。さらに、このような共同体が開催する都市豊年祭などの原住民族文化に関する活動が「アミらしさ」の強化と維持につながっていることも明らかにされている（劉 2002）。このような都市アミ研究においては、非アミの者がアミ主催の都市豊年祭へ参加したり、都市におけるアミのカトリック教会を軸とする共同体に非アミの者が所属したりしていることが言及されている（岡田 2013; 劉 2002）。しかし、こうした研究において、移住後もアミとしての意識を維持、強化するアミ関連の活動や共同体に、非アミである人々がなぜ参加しているのか、その動機や経緯については詳しく述べられていない。

そもそも、原住民族地区[4]に比べ他民族との接触の機会が圧倒的に多い都市原住民の人々について問われるべきなのは、都市における自民族意識の維持と強化だけでなく、汎原住民意識と自民族意識のすみ分けのあり方にあるのではないか。以上の問題に取り組むため、本研究では、調査対象を一つの民族に限定することなく、むしろ複数の民族出身の人々が混在する場に焦点を当て、都市における一民族としての独自性と汎原住民的なつながりがいかに共存しているのかを検討する。なかでも本稿で着目するのは、台中市における原住民族に特化した生涯教

育機関・「台中市原住民族部落大学」である。

上記の目的を達成するために、まず次章では研究方法と調査地について説明する。第 3 章第 1 節では、原住民族部落大学設立の経緯を概説し、第 2 節で原住民族部落大学における 2 つの学習形態を紹介する。つづく第 4 章では台中市原住民族部落大学を取り上げ、第 1 節で学校理念と学習形態、授業内容について、第 2 節で筆者が実際に参加した 2 つの授業について説明し、第 3 節で章のまとめと考察を行う。第 5 章では、これまでの議論を結論としてまとめた上で、今後の研究の課題を提示する。

２．調査方法

都市における汎原住民族規模の組織を検討するにあたり、台中市原住民族部落大学を分析対象としたのは、台中市が原住民族地区と都市原住民が居住する都会区の両方を含むためである。従来の都市原住民研究の調査地は、都市原住民の人口が多い台北市や新北市に集中していた。一方、都市原住民がおかれている状況やその生活は、同じ都会区であったとしても一様ではない。現在、台中市には 36,602 人の原住民が居住しており、そのうち 32,302 人が都会区、4,300 人が原住民族地区で生活をしている（原住民族委員會 2022）。六都[5)]のなかでも都市原住民の人口が 3 番目に多く、原住民地区と都会区を併せもつ台中市の二面性は、台中市における汎原住民族規模の組織のあり方にも影響を及ぼしており、特にその顕著な事例は、台中市原住民族部落大学の学習形態の変化にみることができる（第 4 章 1 節参照）。

そこで本稿では、調査方法として原住民族部落大学に関する文献調査のほか、台中市における参与観察とインフォーマル・インタビューを採用した。具体的には、2019 年 8 月 19 日から 30 日にかけて、台中市 D 区にある都市原住民集落に滞在し、台中市原住民族部落大学とその他の都市原住民コミュニティにおいて参与観察を行いながら、必要に応じて集落の住民や訪問者、台中市原住民族部落大学の利用者などに対してインフォーマル・インタビューを実施した。筆者が当該集落を初めて訪れたのは 2017 年のことである。その後、複数回の訪問を経て今回の調査の実施に至った。

３．台湾における原住民族部落・社区教育の展開

（1）社区大学と原住民族部落大学の設立

原住民族部落大学は、原住民の人々が生涯教育を受けることができる社区大学（コミュニティ・カレッジ）である。主に漢族系台湾人が通う社区大学とは異なり、その内容やカリキュラムは原住民族に特化している。運営主体は、各地方政府にある原住民族事務委員会であり、行政院の原住民族専管機構である原住民族委員会と教育部からの補助を受けている（教育部 2014; 原住民族委員會 2019）。

原住民族教育は、台湾の民主化運動に続き、植民地時代に奪われた原住民族としての権利回復を求める原住民族運動が 1980 年代以降に活発となったことに伴い、注目されるようになっ

た。1998 年には「原住民族教育法」が公布され、第 4 条において「原住民族の一般教育及び民族教育の総称」と定義された原住民族教育の権利が保障されることが明示された。ここにおける民族教育とは、学校で受ける一般教育以外の「原住民族の文化的特性に基づいた原住民学生を対象とする民族知識に関する教育」のことを指す。これに加えて、「原住民族の生涯学習課程を提供し、原住民族文化の革新の促進と部落とコミュニティを発展させる人材および現代市民を育成するための全ての教育」として示されたのが「部落・社区教育」であった（法務部全國法規資料庫 2020a）。

原住民族の部落・社区教育に関心が向けられるようになったのは、台湾の教育体制の改革を求める 1994 年の教育改革運動に追随して起こった社区大学運動に依るところが大きい。社区大学運動では、「当時エリート層にしか与えられてこなかった高等教育を一般民衆に解放し、そして知識の解放によって民衆の批判的思考能力を高め、公共政策に関与できるような力をつけること、これによって公民社会を実現すること」が目的として掲げられ（山口 2015: 161-162）、運動の成果として 1998 年に台湾初の社区大学が台北市文山区に創設された。この運動に影響を受け、2001 年にツォウの浦忠成と楊智偉、プユマの孫大川らなどが中心となり、原住民族に特化した社区教育機関である原住民族部落社区大学の設立を訴えた（喀勒芳安 2006b）。これを踏まえ教育部は、原住民族部落社区大学を政策議題として取り上げ、翌年 6 月に頒布された「終身学習法」には、原住民族の生涯学習を推進することが明示された。その後も教育部と原住民族委員会によって具体的な議論が進められ、2002 年までに 7 つの原住民部落社区大学（当時の桃園県、苗栗県、宜蘭県、南投県、花蓮県、台東県、屏東県）が創設されている（喀勒芳安 2006a）。当初は「原住民部落社区大学」という名称であったが、2010 年度に「原住民族部落大学」と改められた（山﨑 2014）。

（2）原住民族部落大学のカリキュラムと 2 つの学習モデル

以上の流れを経て、原住民族部落大学（以下、部落大学）は現在、15 の県市[6]に設置されている。部落大学のカリキュラムは 10 課程であり（原住民族委員會 2017: 147）、各部落大学は、これらを軸としながら地域の特色に合わせた授業を展開している。

たとえば、原住民族地区と非原住民族地区とでは、当該地域の人々に必要とされる授業内容も異なることから、部落大学の学習形態は「原郷(部落)型」と「都市型」に分類されている（王 2006）。原郷型のカリキュラムは、主に原住民族地区における原住民族部落大学が採用しているものである。対象は特定の民族の人々が中心となるため、教育の目的は、民族の「文化伝承のほか、その特色を際立たせ、部落の自治を目指し、部落組織の発展の促進、伝統や信仰と現代的な発展モデルとの結合を通して、特色のある原住民部落を形成すること」など、当該地域における部落の再建と発展に重点がおかれている（王 2006: 17）。

一方の都市型部落大学の場合、その対象は地域に分散居住している多様な民族出身の人々となるため、カリキュラムは「都市生活適応、原郷とのつながりの形成、部落経済の繁栄」に重

点がおかれている（王 2006: 16）。なかでも代表的なのが、2004 年に台北市原住民族事務委員会と台北市政府教育局によって設置された台北市原住民族部落大学である。同大学は、「都会においても部落のような帰属感を得られるような環境の創造」や「都会独特の部落社会ネットワークの形成」、原住民だけでなく漢人や外国人、新移民なども対象として含め、原住民族に対する理解を広げていくことを目的としている（山口 2020: 116）。

これら 2 つの学習形態に加えて、15 の県市には対象地域に原住民族地区と都会区の両方が含まれているところがある。このような地域では、原郷型と都市型のいずれかを選択することは難しい。そこで採用されているのが、原郷型と都市型が合わさった「混合型」と呼ばれる学習形態である。

４．混合型部落大学を利用する都市原住民の人々

（1）台中市原住民族部落大学の運営と学校理念

台中市原住民族部落大学（以下、台中市部落大学）は、2004 年に承認を受け、2006 年から学生の受け入れを開始した。当時は「台中県原住民部落社区大学」という名称であったが、2010 年の県市合併で台中県が台中市に吸収されたことで現在の名称に変更された。受講生は主に 30 代から 60 代であり、進学や就職、結婚などの理由で自ら都市へ移住することを決めた人々が多い。少数であるが、夏休み期間中の 7 月と 8 月には若い年代の受講生もみられる。

台中市部落大学の運営主体は台中市政府原住民族事務委員会であり、学校事務は弘光科技大学に委託されている（臺中市原住民族部落大學 2020a）。学習形態は、2010 年の県市合併前後で異なる。上の都市型と原郷型のモデルに当てはめた場合、県市合併前の「台中県原住民部落社区大学」は、原郷型として分類されており（阿末 2006: 39）、台中県の 4 つのエリアにおいて 18 の「部落教室」が授業を行っていた（図 1 参照）。そのうちタイヤルが 13 教室、アミ 1 教室、ブヌン 1 教室、パイワン 1 教室、民族不問が 2 教室（合計: 40 科目、学生数: 938 人）であった（阿末 2006: 38-39; 王 2006: 17）。大方の部落教室の内容は、各民族の文化や言語に関するものであった。

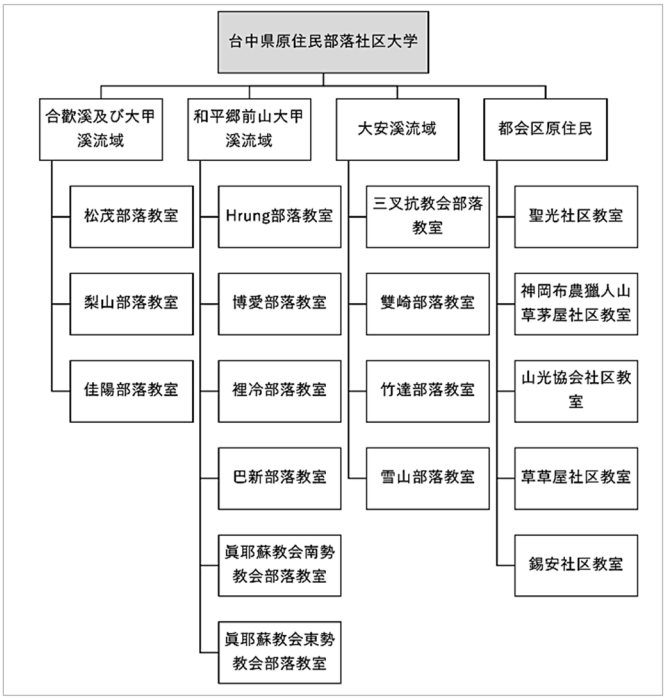

図 1　台中県原住民部落社区大学(2006 年)の部落教室

出典：阿末(2006：39)をもとに筆者作成。

しかし、2010 年に台中県が台中市に吸収され「台中市原住民族部落大学」として再編成されてからは、対象となる人々が原住民族地区である和平区を除いて、8 割以上が都市原住民となったため、都市型と原郷型を組み合わせた混合型が採用されるようになった（臺中市原住民族部落大學 2020a)。原郷型から混合型への移行に伴うカリキュラムの変化は、学校理念においても明示されている：

「都会区あるいは原郷区であっても、部落大学という学習プラットフォームにおける伝承と共同学習の経験を通じて、各民族が元来有していた知識教育システムを振興・発揚し、文化多元的な台湾社会での異なる民族間の文化的特異性を包容しながら、自民族の特色と意識を強調することで各民族の主体的な精神を維持する、原住民社会の承先啓後のための重要な役割を果たすこと」

「本市の原住民民族分布の領域上、原郷型と都市型モデル両方を考慮し、[…] 16 の民族をカバーしながら民族の多様性を本市の新たなチャンスと捉え、部落大学として原住民族伝統知識の構築と推進に取り組み、原住民族の伝統文化を都市にも継続して届けること」

（臺中市原住民族部落大學 2020a）

また混合型という多元的学習形態への移行に伴い、以前よりもエリアと部落教室は細分化され、授業の開講数も増加した（臺中市原住民族部落大學 2020a）（図 2 参照）。

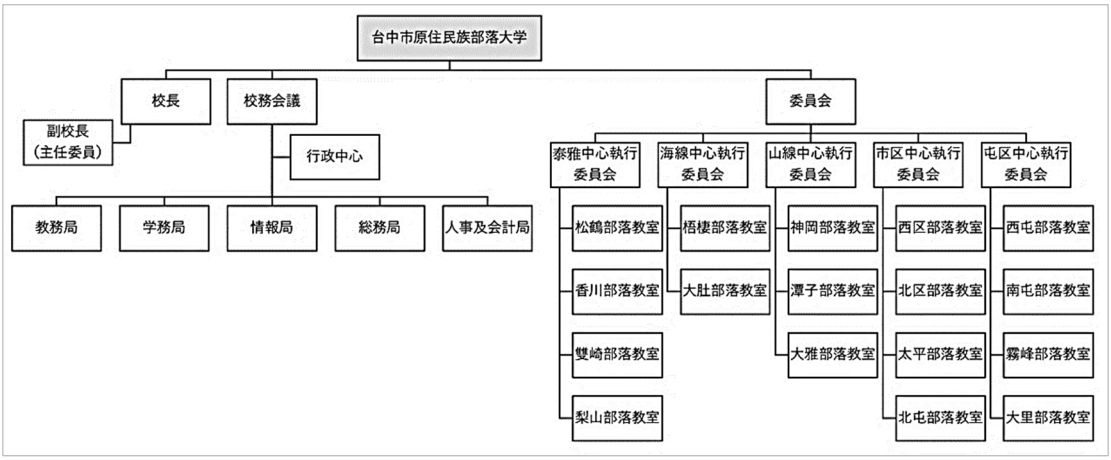

図 2　台中市原住民族部落大学 (2020 年) の組織図

出典: 臺中市原住民族部落大學（2020a）; 行政院原住民族委員會（2011: 57）をもとに筆者作成。

現在の台中市部落大学のカリキュラムは、原住民族の歴史や伝統文化などを学ぶ「原住民文化探索課程」、原住民族の文化産業発展のための「原住民職業産業(創意産業)課程」、部落の発展と再生に焦点を当てた「原住民社区(部落)営造課程」、講師の育成やデジタル技術学習などを含む「原住民コミュニティグループ実用課程」から成る（臺中市原住民族部落大學 2020a）。講師として授業の開講申請を行うためには、応募資格として以下のいずれかの条件を満たしている必要がある：① 大学あるいは独立学院を卒業しており、開講する科目に関する 1 年以上の実務経験を有している者、② 専門学校を卒業しており、開講する科目に関する 3 年以上の実務経験を有している者、③ 特殊技能あるいは特殊言語課程の場合は、実績証明書・技術証明あるいは語学検定の優秀な成績を証明するものを提示できる者（臺中市政府原住民族事務委員會 2020）。申請書には、該当するカリキュラムや開講期間、教育法等、授業内容に関する事項が設けられており、台中市政府原住民族事務委員会による課程審査委員会の審査を経て、授業開講の可否が決定される（臺中市政府原住民族事務委員會 2020）。開講科目の決定後は、台中市部落大学の公式ホームページなどで情報が公開され、オンライン上で科目登録の手続きが開始される。受講に関しては、16 歳以上であれば学歴や身分を問わず、誰でも授業を受けることができるようになっている。

具体的に 2020 年度に開講された授業をみてみると、特定の民族に関する授業は 26 科目であり、民族不問の授業は 25 科目、そのうち「原住民族」関係の授業は 14 科目であった（付録参

照)。県市合併前は、民族不問の部落教室が 18 教室中 2 つに限られており、大部分の授業が民族別であったことを考えると、混合型となってからは「原住民族」に関する授業が大幅に増えている。

特定の民族向けの授業として多いのが、族語や歌の学習のほか（6, 9, 17, 22, 25, 49, 50, 51）、民族固有の伝統的服飾品を製作するものである。たとえば、アミの「霞披」と呼ばれる肩飾り（2）やショルダーポーチのような形をしたアミの伝統儀礼に用いられる「情人袋」(28)、パイワンの民族衣装や髪の装飾（3, 7, 12）など、各民族独自の言語や物質文化が取り上げられている。一方、民族不問の授業は「原住民族」と直接関係しない実用的技術や知識に関する授業のほかに、「原住民族」関連として、複数の民族に共通する文化を取り上げた内容のものが多い。弓（14, 15, 24, 29）や特定の材料を用いた工芸品（5, 8, 13, 21）の授業がこれに当てはまる。また、粟酒の製造方法（19）や麻を用いた工芸品（31）の授業など、共通文化を扱うが、初回の授業で特定の民族の事例を取り上げるものもある。共通文化に関する授業以外には、原住民族料理の授業 （38）など、タイヤル・パイワン・セデック・アミ・タオ・サイシャット・タロコ・ルカイ・ブヌンの順に、各週で異なる民族の料理を学ぶものがある。他にも、「原住民風」のメイク（次節参照）やネイル（39）を教える授業が開講されることもある。

もちろん特定の民族に関する授業であっても、基本的には誰でも参加することができるが、受講生は当該民族出身の人々に限られることが多い。対して民族不問の授業は、講師と同民族の受講生が多い傾向にはあるが、異なる民族出身の受講生も一定数いるため、学校理念で目指されていた通り、複数の民族の人々が集まり共同学習を行う場となっている。

(2) 台中市原住民族部落大学における 2 つの授業

本節では、筆者が実際に参加した授業について紹介し、特定の民族向けの授業と「原住民」向けの授業の違いを示す。筆者は 2019 年度に台中市部落大学における 2 つの授業に参加した。1 つ目は、パイワン女性 A 氏が開講していた「南パイワン牡丹服飾(二)」である。この授業では、A 氏の出身地である牡丹郷の女性向け民族衣装を製作する。期間は 7 月から 8 月にかけて毎週日曜日（計 6 回）であった。受講生は 11 名前後のパイワン女性たちであったが、必ずしも牡丹郷出身ではない。授業が牡丹郷に関する内容であり同郷の人々が集まることから、必然的に元より A 氏と知り合いであった受講生の参加が目立つ。これに限らず、他の台中市部落大学の授業に関しても、講師と受講生との間における既存の人間関係に基づいた人々の参加が多い。

民族衣装に関する授業を開講する A 氏は、2015 年から 7 つの民族（アミ、パイワン、ルカイ、プユマ、ブヌン、タイヤル、タオ）の伝統衣装を貸出す工房を経営している。A 氏曰く、当初はパイワンの民族衣装のみ貸出していたが、他民族の衣装もレンタルしてほしいという顧客の要望に応え、取り扱うようになったという。また、レンタルサービスだけでなく、注文を受けて顧客の民族衣装を製作したり、原住民族の服飾品製作に必要な材料のみを販売したりもしている。

工房の経営によって得られた経験と技術は、A 氏の台中市部落大学における授業でも生かされている。「南パイワン牡丹服飾(二)」において A 氏は、受講生に型取りから縫製、装飾にいたるまで指導し、受講生は民族衣装を 1 人 1 着完成させている。最終日には、それぞれ製作した衣装を着用し、記念撮影を行った。台中市部落大学の授業の多くは、台中市原住民総合サービスセンター[7] で開講されるが、この授業に関しては A 氏の工房にある作業場で行われた。工房は A 氏が居住する小規模な都市原住民集落の中に位置しており、集落には彼女を含むパイワンのほか、アミ、タイヤル、ブヌンの人々が共住している。

2 つ目の授業は、A 氏も受講していた原住民職業産業課程の「初級メイク色彩応用講座」である。講師は、結婚写真を撮影するスタジオの経営者で、南投県出身のセデック女性 T 氏である。期間は 8 月の毎週火曜日と水曜日、18 時から 21 時まで（計 6 回）であり、授業は台中市原住民総合サービスセンターで行われた。2019 年度の受講生は 11 名で、特定の民族向けの授業ではないため、受講生の出身民族もセデック、タイヤル、タロコ、パイワン、ブヌンと多様であった。

化粧講座の目的は「原住民の顔にあったメイク方法」を学ぶことである。まず前半の授業ではメイク道具や技術に関する説明がなされ、紙の上で基礎的なメイクの練習を行う。基本的な知識と技術に関する講義の後は、T 氏がお手本として受講生の顔に化粧をしながら、「原住民の顔は彫りが深くて［…］、日本や韓国式の化粧とは相性が悪いけど、欧米風メイクは原住民に合う」ということを説明し、それぞれの肌の色にあった下地選びや眉頭の強調の仕方、真紅のリップのひき方などを実践的に伝授していた。その後、受講生は 2 人 1 組となって、パートナーの顔に化粧を施していく。実際に自身の顔に下地やアイシャドウ、眉、リップなど完全な化粧を施すのは、最後の授業のみである。授業最終日には、民族衣装を持ち寄って記念撮影をおこない、互いのメイク技術の成長を確かめ合う時間が設けられた。成果発表の際には、メイクについてだけでなく、それぞれの民族衣装の来歴やデザインの特徴を互いに紹介し合う。自分の民族衣装を持っていない受講生に関しては、A 氏の工房から民族衣装を借りていた。

（3）まとめと考察

台湾各地に設置されている部落大学は、当該地域の特色に合わせて教育方針やカリキュラムを変更していた。なかでも台中市部落大学は、原住民族地区と都会区の原住民を対象としていることから、都市型と原郷型という 2 つのモデルを組み合わせた混合型を採用している。学校理念に着目すると、異なる民族の人々と共に学習する機会を設けることで、他民族の文化的独自性を受け入れると同時に、主体的な自民族意識の発揚を促すことが明示されていた。こうした目的は、汎原住民意識と自民族意識の共存を志向するものとして捉えられる。

開講されている授業の具体的な内容に注目してみると、特定の民族向けの授業と「原住民」向け、あるいは「原住民風」に関する授業が設けられており、学校理念で示されている共同学習は後者の授業において行われている。「原住民」向けの授業では、弓箭の製作や射芸など旧時

の原住民族社会における生業や、薏苡や粟、麻といった特定の植物の加工技術に関する内容など、多様性を有する原住民諸民族の間でも、特に共通している文化的側面を意図的に取り上げたものが多い。また筆者が参加した「原住民風」の化粧講座での T 氏の発言に注目すると、その主語は一貫して「原住民」であり、彼女によって想像、内面化された原住民像に合わせて、どのような「原住民風」メイクを施すのかが決められていた。T 氏による「原住民の顔は彫りが深くて［…］」という語りからは、彼女がメイクを通して具現化していた原住民像が、いわば外部者によってステレオタイプ化された原住民像による影響を受けていることが窺える。本稿の事例を通じて、「原住民」向けの授業において、講師がどのような要素を「原住民風」とし、どのような内容を教えるのかに注目することで、必ずしも政治的社会的な運動とは直接関係しない人々の汎原住民意識が、いかなる要素や認識によって構成されているのか、その内実を知るための端緒が開けることが示された。

こうした授業は、自民族だけでなく他民族の人々との関係を構築するきっかけともなっている。A 氏に着目すると、彼女は自身の授業を通して都市パイワンの人々と関係しながら、同時に T 氏の授業に参加することで異なる民族の人々と出会い、他民族文化に対して関心を寄せていた。台中市部落大学内の諸活動そのものだけでなく、それらを通じて都市原住民同士が知り合い、人間関係が広がるなかで、新たな団体やコミュニティが生まれることもある。たとえば、A 氏が居住する都市原住民集落の住民の一人は、彼女と部落大学での授業を通して知り合い、集落に移り住んできた者である。2 人は後に、原住民族文化関連の諸活動の開催や取材を行う民間団体を立ち上げ、部落大学の授業の取材を行うようになった。他にも、部落大学を通して A 氏が経営する工房の存在を知り、顧客として利用するようになったり、定期的に集落を訪れ、A 氏との関係を保ち続けていたりする者も少なくない。このように、台中市部落大学のような汎原住民族規模の公的機関を起点とするつながりは、異なる民族の共住関係や新たな汎原住民的な関係を生み出すきっかけともなっている。

５．結論

本稿では、原住民族部落・社区教育と原住民族部落大学設立の経緯を整理した上で、混合型である台中市原住民族部落大学が目指す、汎原住民意識と自民族意識の共存に向けた実践が具体的にどのようなものであるかを検討してきた。

外来政権による原住民族政策や共通の歴史経験を素地とし、1980 年代の原住民族運動を契機に顕在化した汎原住民意識は、台湾社会における原住民族の社会的地位向上に役立てられた。原住民族運動の発展と汎原住民意識の顕在化は、相互補完的な関係にあったのである。一方で、汎原住民意識に対して批判的な意見もある。アミの民俗学者リボク（黄貴潮）は、いったい誰が「原住民」であるのかという問いとともに、アミの文化や歌、踊りが次第に同質化していることを指摘した（小林 1997：71）。汎原住民意識の顕現によって個々の民族が「原住民族」という名の下に覆われ、諸民族が有していた文化的差異や多様性が損なわれてしまうという負の

側面も否定できないのである。

こうした汎原住民意識と自民族意識のせめぎ合いは、汎エスニシティ固有の特徴ともいえる。社会学者であるオカモトとモラは、汎エスニシティがしばしば人種やエスニシティなどの概念と同義のものとして扱われることがあるが、実際には「メタグループの統一性を発展させながら、サブグループの差異を維持することから生じる固有の緊張関係」を有している点において、汎エスニシティは他の概念と区別されるとしている（Okamoto et al 2014：221）。汎エスニシティは、一つのエスニック・カテゴリーとしての独自性を際立たせ、その同質性を強化するというよりも、サブグループが独自の文化や慣習、言語によって構成されており、その多様性を成員が認識することで初めて、発展し、維持されうる多層性を有した包括的枠組みとして捉えられなければならない。

本稿で扱った台中市部落大学の事例はまさしく、メタグループの統一性とサブグループ間の差異をいかに維持するのかという汎エスニシティの問題と関わるものであった。本稿では、台中市部落大学が採用する混合型という学習形態に注目することで、都市における原住民族部落・社区教育での汎原住民意識と自民族意識の共存のあり方の一端を示し、これが新たな汎原住民族規模の都市原住民コミュニティや異なる民族の人々が協働する機会を生み出していることを明らかにした。

だが一方で、台中市部落大学における授業内容が具体的に個々人の汎原住民意識と自民族意識にどのように作用しているのかといった、個人レベルの汎エスニックな行動や同定化に対する影響について、本稿では十分に分析できていない。個々人が状況や文脈に応じて、汎原住民意識と自民族意識との間にどう折り合いをつけ、それらをいかに両立しているのか、それとも一方に偏っているのかという点について、調査を続けることが今後の課題として残るだろう。

付録　2020 年度台中市原住民族部落大学講義要綱

課程	民族		科目名
原住民文化探索課程	1	プユマ	Pinuyumayan 年祭＜季、紀＞
	2	アミ	Alo’ say say 霞披（肩飾り）の製作
	3	パイワン	南パイワン牡丹服飾(二)
	4	タイヤル	タイヤルの頭飾と首飾りの創作
	5	民族不問（原住民）	薏苡を用いた創作（布バッグ）
	6	プユマ	都会区プユマ族語研習
	7	パイワン	パイワン伝統の羽毛を用いた髪編み
	8	民族不問（原住民）	天然繊維の織り方
	9	アミ	アミ語言葉の構成法
	10	タイヤル	タイヤル伝統網袋の織り方

	11	タイヤル	タイヤル伝統弓編 -肩紐 Wakin の製作
	12	パイワン	パイワン男性ズボンのクロスステッチ
	13	民族不問（原住民）	原生植物流木と泥作創作班
	14	民族不問（原住民）	原住民伝統弓箭製作と射芸教学
	15	民族不問（原住民）	原住民伝統射芸審判研習課程
	16	パイワン、ルカイ	パイワン・ルカイ伝統刺繍創作（男娃娃）
	17	ルカイ	ルカイ語認証テストクラス
	18	ブヌン	ブヌン男無袖長衣 haban 製作クラス
	19	民族不問(原住民/ブヌン)	酒麹の製作と醸酒
	20	ブヌン	ブヌン伝統料理
	21	民族不問（原住民）	原住民族植物学 -苧麻の使用法
	22	パイワン	パイワン古調と歌謠伝唱
	23	セデック	セデック伝統機織り-織布初級
	24	民族不問（原住民）	原住民伝統弓箭製作上級
	25	アミ	アミ族語認証テスト
	26	タイヤル	Lubuw na Tayal タイヤル琴声
原住民職業産業課程	27	ルカイ	ルカイ伝統頭巾と百合がま口包
	28	アミ	アミ八芒星の想いを伝える情人袋
	29	民族不問（原住民）	伝統弓箭教学と鉄製品製作 基礎クラス
	30	パイワン、ルカイ	盛装婚礼飾品（頭飾、首飾り）
	31	民族不問（原住民/アミ）	原住民の麻紐の編み方
	32	民族不問	皮製品の製作（ベルト、バックパック）
	33	ヤミ	ヤミの首飾り上級
	34	民族不問	レザーカービング
	35	民族不問	投資と財務管理観念の養成
	36	民族不問	十字架ビーズ創作工芸
	37	民族不問（原住民）	原住民装飾品学
	38	民族不問（原住民）	原住民創作料理
	39	民族不問（原住民）	原住民風ジェルネイルクラス
	40	民族不問	ブランドデザインの基礎と実践
	41	ブヌン	ブヌン男女頭飾製作
原住民社区営造課程	42	民族不問	社区営造壁画公共芸術創作
原住民コミュニティ	43	民族不問	頭部 SPA 養生推進課程

グループ実用課程	44	民族不問（原住民）	原住民族語絵本製作の実務と創作
	45	民族不問	部落大学授課程成果情報メディア応用
	46	民族不問	デジタルカメラ・ビデオマーケティング実践
	47	民族不問	菜食料理養生クラス
	48	民族不問	介護福祉士研習訓練クラス
	49	ブヌン	ブヌン語中高レベル試験訓練クラス
	50	タイヤル	賽考利克タイヤル語中高級強化クラス
	51	タイヤル	賽考利克タイヤル語中高級松鶴強化クラス

出典: 臺中市原住民族部落大學（2020b）をもとに筆者作成。

付記

本稿は、筆者の修士論文（2021 年度）の第 5 章を加筆・修正したものである。修士論文の作成に当たっては、指導教授である三尾裕子先生をはじめ、多くの先輩方や院生、そして調査地の皆様にご協力いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

本稿は、2021 年度慶應義塾大学若手研究者研究奨励奨学金ならびに 2021 年度 JST 博士後期課程学生支援プロジェクト「未来社会のグランドデザインを描く博士人材の育成」による成果の一部である。

【註】

1) 本稿では、先行研究における用法に従って台湾の原住民族による汎エスニシティを「汎原住民意識」と示す。また、「汎原住民的なつながり」のように、原住民という身分を有する個人間の関係を示す場合は「汎原住民」、「汎原住民族規模」のように集団や組織などにおける原住民族としての集合性が強調される文脈においては「汎原住民族」としている。

2) 「部落」とは一般的に、日本植民地期の原住民族政策の影響が及ぶ以前の原住民族社会において、政治的・経済的活動の基本的単位として独自の社会規範や自律性を有していた原住民族の伝統集落のことを指す。当時は部落という枠組みが仲間と仇敵を区別する境界となっていた。その後、部落は日本政府の介入によって、次々と解体・強制移住させられ、その政治的単位としての自律性を失うことになる（松岡 2012）。現代の原住民族基本法において部落は、「原住民が原住民族地区の一定の区域内においてその伝統規範に基づいて共同生活することによって結合・成立した集団であり、中央の原住民族主管機関による認定をへたもの」と定義されている（石垣 2011: 383）。

3) 非原住民族地区（註 4 参照）に戸籍を置くか、そこで生活している原住民の人々のことを指す。現在、原住民族総人口のうち約 48.7%が都市原住民である（原住民族委員会 2022）。また戸籍を移さず都市生活を送る人々も多いことから、実際にはすでに原住民族の半数以上が都市原住民であると考えられている。

4) 2005 年 2 月に施行された「原住民族基本法」で「原住民族地区」は、「原住民族が伝統的に居住し、原住民族の歴史的な淵源および文化的特徴を有しており、本会によって承認された地域」と定義されている（法務部全國法規資料庫 2020b）。承認された範囲には、山間部 30 地域と平地 25 地域の計 55 地域（郷、鎮、市、区）が含まれている（原住民族委員會 2020）。

5) 台湾の行政院が直轄する 6 つの市（台北市、新北市、桃園市、台中市、台南市、高雄市）を指す。

6) 台北市、新北市、桃園市、新竹県、苗栗県、台中市、南投県、嘉義県、台南市、高雄市、屏東県、基隆市、宜蘭県、花蓮県、台東県。

7) 2021 年より台中市原住民総合サービスセンターは、「台中市原住民族文化館」と改称された。

【文献】

阿部珠理, 2003, 「アメリカ・インディアン・アイデンティティと文化創造—汎インディアン運動を中心に」『立教アメリカン・スタディーズ』25: 71-88.

──2008, 「部族から民族へ—アメリカ先住民における汎インディアン意識の醸成と汎インディアン文化の創出」『国際的な人の移動と文化変容』18-34.

阿末, 烏桔, 2006,「都會型 vs 部落型 原住民部落社區大學課程的比較」『原教界』10: 38-40.

Cornell, S., 1988, *The Return of the Native: American Indian Political Resurgence*, Oxford University Press.

法務部全國法規資料庫, 2020a,『原住民族教育法』,(2020 年 9 月 24 日取得, https://law.moj.gov.tw/LawClass/LawAll.aspx?pcode=H0020037）.

──2020b,『原住民族基本法』,（2021 年 1 月 20 日取得, https://law.moj.gov.tw/LawClass/LawAll.aspx?pcode=D0130003）.

深山直子, 2012,『現代マオリと「先住民の運動」─土地・海・都市そして環境』風響社.

石垣直, 2011,『現代台湾を生きる原住民—ブヌンの土地と権利回復運動の人類学』風響社.

教育部, 2014,『原住民族部落大學補助要點』6 月.

喀勒芳安, 谷縱, 2006a,「原住民部落大學大事紀」『原教界』10: 18-19.

──2006b「原住民部落大學研究論文評析」『原教界』10: 20-23.

小林岳二, 1997,「「台湾原住民族」、模索していく民族像」『PRIME』6: 53-77.

劉秀梅, 2002,「台北市における都市原住民の豊年祭」『人間文化 H&S』17: 107-116.

劉芳妤, 2017,「都市原住民」『原教界』78: 46-47.

李重志, 2016,「臺灣都市原住民研究相關學位論文之回顧(1987~2015）」『原住民族文獻』29:34-41.

松岡格, 2012,『台湾原住民社会の地方化—マイノリティの 20 世紀』研文出版.

大野あずさ, 2010,「アメリカ・インディアン都市移住計画(1952~73 年) —アメリカ先住民の都市化とコロラド州デンバーにおける汎インディアン・コミュニティの形成について」『大阪経大論集』61(2): 205-227.

岡田紅理子, 2013,「都市原住民の生活誌: 台北に移住したアミの「都市」,「故郷」,「共同体」」『Monograph Series No.13』上智大学アジア文化研究所.

Okamoto, D & C. G. Mora(eds), 2014, “Panethnicity,” *Annual Review of Sociology*, 40: 219–39.
孫大川, 1997,「汎原住民意識と台湾の民族問題の相互作用」安場淳訳『PRIME』6: 29-51.
臺中市原住民族部落大學, 2020a,「關於我們」,（2020 年 9 月 25 日取得, https://www.tbc.apc.gov.tw/taichung/704f85d5-6a62-4c89-8909-a9e24dfb20ad/tab）.
──2020b,「109 年度臺中市原住民族部落大學線上報名課程系統」,（2021 年 1 月 20 日取得, https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLScpA-ARIiS4gx_-rcIftbsh0jTEnaXzhP-2KnKqXZghALZ_Bg/viewform）.
臺中市政府原住民族事務委員會, 2020,「109 年度臺中市原住民族部落大學開課申請須知」,（2021 年 1 月 20 日取得, https://eycc.ey.gov.tw/Page/9FAC64F67005E355/b7dfb2db-74ef-4d45-8474-be991e69195f）.
Tomas, R. K., 1965, “PAN-INDIANISM,” *Midcontinent American Studies Journal*, 6(2): 75-83.
謝世忠, 1987,『認同的汚名』自立晚報社.
行政院原住民族委員會, 2011,『傳承智慧・再現價値─100 年原住民族部落大學成果專刊』行政院原住民族委員會.
山口香苗, 2015,「台北市における社区大学の実態─士林社区大学からみる「公民社会」形成のアプローチ方法」『東京大学大学院教育学研究科紀要』55: 161-171.
──2020,『市民がつくる社会の学び－台湾「社区大学」の展開と特質』大学教育出版.
山﨑直也, 2014,「台湾原住民族教育の新動向─『部落学校設立十年計画』について」『日本国際教育学会第 25 回大会記録』140-147.
楊士範, 2016,「都市原住民文獻中所呈現之視域與認識論反思文」『原住民族文獻』29: 22-33.
尤天鳴, 2014,『都市阿美族在桃園縣的結社』國立政治大學博士論文.
原住民族委員會, 2017,『106 學年度原住民族教育調查統統計』原住民族委員會.
──2019,「109 年度原住民族部落大學補助計畫」,（2021 年 1 月 20 日取得, https://www.cip.gov.tw/zh-tw/news/data-list/A791109594724BE7/2D9680BFECBE80B67A922E2291CC9D8F-info.html）.
──2020,「原住民族地区(30 個山地鄉及 25 個平地鄉鎮市)」,（2022 年 4 月 11 日取得 https://www.cip.gov.tw/zh-tw/village/list.html?cumid=1E4A2846561931B1）.
──2022,「11102 台閩縣市鄉鎮市區原住民族人口-都會比例.xls」,（2022 年 4 月 11 日取得, https://www.cip.gov.tw/zh-tw/news/data-list/940F9579765AC6A0/77AEA112985C75CBE30A90A0C0814788-info.html）.
王雅萍, 2006,「部落･學習･競爭力 從部落大學到原住民部落社區大學的原住民教育」『原教界』10: 10-17.

（ますだ　きわこ　慶應義塾大学大学院社会学研究科）